



高名なお坊さん(その16)

法然上人(1133年~1212年) 浄土宗の開祖

源空上人ともいいます。

長承2年(1133)、美作国(現在の岡山県)にて、押領使・漆間時国の子として生まれました。

9歳の時に父を殺された法然は、その遺言によって出家し、比叡山に登ります。そして、承安5年(1175)、43歳で「浄土宗」を開きました。

浄土宗は、「救いは念仏を称えることで得られる」という『専修念仏』の教えを中心としていました。

ただひたすらに念仏を称えることで、いつでも、どこでも、誰もが平等に阿弥陀仏に救われて、極楽浄土に往生することができる。

そうした「他力」の教えでもある浄土宗は、そのわかりやすさも手伝って、公家や武士だけでなく、経典を学び、寺院へ寄進や参詣する余裕のなかった多くの民衆にも希望を与え、日本全土に浸透しました。



法然上人の肖像画



御廟(法然上人のご遺骨をご奉安する廟堂)

一方で、浄土宗は、伝統的な仏教の強い反感も招きました。建永2年(1207)、法然は75歳で、ついに、讃岐国に流罪となります。赦免された法然は、建暦元年(1211)には京に帰りましたが、その翌年、80歳で生涯を閉じられました。



拝殿(法然上人の御廟を拝する建物)



披講の御影(知恩院蔵)

住職レター

今年の冬は、厳しい寒さの日が多かったように思います。しかし朝晩の寒さも緩み、日中は春の日ざしが、やわらかく注ぎ込まれ、いよいよお彼岸の季節を迎えました。厳しい冬だったからこそ、春の和やかな光に包まれる心地良さを、有り難く感じることが出来ます。亡くなった祖母が、元気な時、旅行から帰ってきたら、

「やつぱり、我が家がえくわ」と、よく言っておりまして。帰る家があるからこそ、旅行が楽しいのでありましょう。

旅の楽しみは帰る故郷(ふるさと)があるからこそ、安心して旅をすることが出来ると言われます。人生の旅もまた、

帰る故郷がある人と「故郷」に気づかない人生では、今を生きる生き方に大きな違いがあります。

このお彼岸のご縁は、あらためて人生の旅の「故郷」を「浄土」として示されたことを、再確認させていただく行事でもあります。

お彼岸は日本独自の仏教行事で、季節の変わり目の「春分」「秋分」に、西に沈む太陽の先に阿弥陀仏の浄土を想い、

此岸(この世)から彼岸(お浄土)へ至る、「到彼岸」の仏事として勤まってきました。

浄土というとか何か夢物語のような世界を想像しがちですが、浄土とは阿弥陀仏が願いを持って建立された、私たちの「いのちの故郷」です。

親鸞聖人は、私が浄土を願うのではなく、浄土から私が

願われている存在であること

をお示し下さいました。その

浄土からのほたらきかけがお

